

## 坂出港の「みなと文化」



【瀬戸大橋 与島から北方を望む】

中山 博道

---



## 目 次

【坂出港の位置と成り立ち】	92-1
第1章 坂出港の古代から現代に至る港の整備と沿革	92-1
1. 古代の坂出港	92-1
2. 中世の坂出港	92-2
3. 近世の坂出港	92-2
4. 明治時代の坂出港	92-4
5. 大正時代の坂出港	92-5
6. 昭和時代以降の坂出港	92-5
第2章 「みなと文化」の要素的概要	92-7
1. 船を用いた交易交流活動によって伝え育ってきた「みなと文化」	92-7
(1) 文芸・万葉歌・菅原道真の詩「寒早十首」	92-7
(2) 言語・方言	92-9
(3) 信仰・塩釜・金比羅さん	92-9
(4) 食べ物・さぬきうどん	92-10
(5) 海運とアツケシ草	92-11
(6) 参詣・四国遍路とこんぴら参り	92-11
(7) 対岸交流	92-12
2. 交易による流通市場の形成によって育ってきた「みなと文化」	92-12
(1) 物資の流通を担う産業	92-12
(2) 交易物資の保管施設・倉庫・サイロ	92-13
(3) 行政施設・船番所・役所（税関・海上保安署など）	92-13
3. 航路ネットワークを利用した 地場産業の発達によって育ってきた「みなと文化」	92-14
(1) 港湾関連産業・船具・船舶食料品店	92-14
(2) 港湾利用産業	92-14
・ 漁業	
・ 製塩業	
・ 精麦・製粉	
・ 坂出の港湾利用産業の今昔	

4. 港を介して蓄積された経済力に基づき	
人々の生活の中で育ってきた「みなと文化」	92-16
(1) 遊里・料亭	92-16
(2) 祭り（港に関わる祭り）	92-16
(3) 文芸施設	92-17
5. 港を中心とする	
社会的経済的営みの総体として形成されてきた「みなと文化」	92-17
(1) 港、海運に関する歴史的施設	92-17
・坂出壟田之碑	
・旧坂出港務所	
・勅使灯笼	
・両景橋公園	
(2) 港町の町並み	92-18
第3章「みなと文化」振興に関する地域の動き	92-19
(1) 坂出港の振興と今後の課題	92-19
・災害時の物流拠点	
・瀬戸内国際芸術祭	

---

所在地：香川県	港の種類：港湾	港格：重要港湾
---------	---------	---------



【位置図】



【現況写真】

### 【坂出港の位置と成り立ち】

坂出市は日本一面積の小さい県、香川県のほぼ中央にあり、瀬戸大橋の四国側の起点となっている。坂出港はその橋のすぐ東側に広がる海域一帯で、北には備讃瀬戸航路があり、大小の船舶が行き来している。



【西運河（縦登り）】

成り立ち・・・現在の坂出市の市街地は、1600年頃より前は遠浅の海であったが、少しずつ埋立てられ生活の場が広がっていった。そして文政12年（1829）久米通賢が高松藩の命を受けて海を埋立て、そこに塩田と畑を造成した。埋立て面積は約230haで、これによって当時の坂出の面積は2倍になった。塩田には海水の取入れと塩の積出しなどのため、小船の通れる水路が必要で、その為に沖に通じる西運河が造られた。縦登りといわれるこの西運河こそが、坂出港の原点で、やがて沖に湛甫が造られ、波止も築かれて港へと発展していくのである。

## 第1章 坂出港の古代から現代に至る港の整備と利用の沿革

### 1. 古代の坂出港(大和朝廷時代を含む)

古代坂出の港は、松山の津と呼ばれるところである。松山の津は福江、江尻、西庄、林田地区など、坂出の綾川河口域にできた港の総称である。ここは、当時本州側の沿岸を通る航路に対して四国側の航路に当り、讃岐の国府と綾川でつながる重要な港であった。



【写真-1 松山の津碑】

現在の坂出市府中町にあった讃岐国府の背後の城山きやまには7世紀後半に造られた古代山城の跡が残っており、国の史跡に指定されている。663年に日本軍は朝鮮半島の白村江はくそんこう（はくすきのえ）の戦いで、唐、新羅連合軍に敗れ、逆に侵攻されることを想定して瀬戸内海沿岸にも山城を築いたもので、当時の朝廷が城山にほど近い松山の津に重きをおいていたことが推察できる。また、この松山の津では後述するが、万葉集も詠まれたとみられる他、多くの著名人がこの港から坂出の地を踏んでいる。

万葉集では巻1-5に「讃岐国の安益あやの郡こおりに幸す時に、軍王いさま（いくさのおおきみ）山を見て作る歌」というのがある。著名な人としては、菅原道真が仁和2年（886）～寛平2年（890）まで4年間、讃岐の国司を務めた際、港を利用したことが「菅家文草」の中の詩に詠まれている。

また、保元元年（1156）保元の乱で敗れた崇徳上皇が讃岐に流された時も松山の津を経由したとみられる。崇徳上皇はこの地で亡くなられている。

坂出市には四国霊場81番札所白峯寺しらみねのみさきに隣接して上皇の白峯陵があるが、西行法師も上皇を慕ってここを訪れている。西行の「山家集」には、「白峯と申す所に御墓みはかの侍りけるにまゐりて、よしや君むかしの玉の床とてもかからんのち後は何にかはせん」との歌が記されている。このあたりのことは、鎌倉時代の軍記物語である「保元物語」や江戸中期の上田秋成の「雨月物語」にあり、よく知られている。

## 2. 中世の坂出港

室町時代、四国を治めた細川頼之が、坂出市の西隣、宇多津町に拠点をもつたため、讃岐の港の中心はここに移り、松山の津の利用も減少したと思われる。ただ坂出市史には次のような記述がある。「寛正元年（1460）4月、京都の崇徳院御影堂僧衆が北山本新庄（現在の坂出市の一部）の年貢輸送船（号福江丸）が兵庫関で関銭を徴収されたことに抗議し幕府に訴えた（崇徳院御影堂文書）」というものである。

当時の坂出市の福江郷は、京都下河原の崇徳院御影堂（現在は碑が残るだけ）の御領となっており、上記1460年より約10年前の東山御文庫記録によると、細川勝元下知状として年貢輸送船福江丸、枝丸等の関所無税通航を命じる記録が残されている。これによって御影堂の僧が室町幕府に訴えたもので、現在は坂出市の内陸部に位置する福江町は、当時海岸線で港があり、ここに福江丸などが所属していたことがわかる。

## 3. 近世の坂出港

寛文7年（1667）に江戸幕府の巡検使、高林又兵衛が讃岐の各浦を見て回っている。その中で、「サカイテ120軒、磯ナリ。遠見番所アリ。御供所5軒」と船から見た坂出の様子を書き残している。（坂出市史）

当時の坂出は、海も少しは埋立てられ人家も増えてはきていたが、まだまだ遠浅の海が北に広がっていたことがうかがえる。

このような坂出市に画期的な出来事が起きる。

文政12年（1829）、久米栄左衛門みちかた通賢による坂出墾田の竣工である。



【写真-2 久米通賢立像】

久米通賢は香川県の東にあたる東かがわ市の出身で、18歳で大阪の<sup>はざましげとみ</sup>間重徳の門をたたき、天文、測量術と西洋の知識を身につけた。この通賢を私達地元では尊敬と親しみを込めて「通賢さん」と呼んでいる。やがて、「通賢さん」は高松藩に招かれ、藩の財政を好転させるために坂出の海を埋立て、塩田と畑、約230haを造成する。



【写真-3 入浜式塩田作業風景】

このうち塩田については久米式と呼ばれ、後の入浜式塩田の手本となり、坂出市を全国一の塩田の街とした。

前述のように、このとき「通賢さん」は小船の通れる西運河を造成し、これが坂出港の原点となったわけである。

塩田が完成して数年後、天保2年（1831）には、西運河に通じる海に石堤で囲った沖湛甫が築かれ、更に波止が築かれて港の形を整え出船入船でにぎわっていく。

弘化4年（1847）に刊行された「金毘羅参詣名所図会」には、「坂出の川口はすこぶる便宜の舟着きなるゆへ、入津、出帆平生（つね）に絶へず。在中は高松街道の往還なれば……商屋建ち連なり賑わしき地なり。浜辺には数丁の塩釜続きて見ればなり。」とある。



【写真-4 民賊物語】

安政元年（1854）11月の安政の大地震では大阪との交流を示す注目すべき記述がある。

江戸末期に坂出の医者、宮崎栄立が書いた「民賊物語」によれば、この地震による大阪表木津川での坂出船の被害の状況を、大破・入福丸200石積、灘吉丸200石、弁天丸100石とし、小破として4隻の船の名前を挙げている他、この地震で難を逃れようと船に乗っていた者が高波によって破船し、水死した者は数が知れないとも書いている。



【写真-5 現在の西運河眺望】

坂出の船が多数大阪へ入港していたことを物語ると共に津波による被害が大きかったことがうかがえる。

塩飽の水夫は操船技術も確かなものがあった。万延元年（1860）幕府の軍艦咸臨丸が渡米した時、水夫50人のうち35人が塩飽出身で坂出市の2つの島からも4人が乗り組んでいた。

#### 4. 明治時代の坂出港

保元の乱に敗れ坂出に流された崇徳上皇は、御配流 8 年、再び都に帰ることなく 46 歳の生涯を坂出市にあった国府近くで閉じられた。

慶応 3 年（1867）、16 歳で践祚<sup>せんそ</sup>した明治天皇は、父君孝明天皇の御遺志を継ぎ、崇徳上皇の御霊を京都に新しく造営した白峯神宮<sup>しらみねじんぐう</sup>にうつされた。その際、天皇の命をおびた勅使が坂出港に上陸し、上皇の眠られる白峯陵へ向かわれた。そのときの様子を当時の坂出の医師津山良人が「勅使拝観日誌」に詳細に書いている。

その大意は、「明治天皇は崇徳天皇の御神霊を京都へ迎え奉らんとし、新廟を京の今出川通り小川の西に御造営され、白峯宮と称された。これまでに知らせがあつてこの年 8 月 25 日（慶応 4 年 1868 年 9 月に、明治と改元）に勅使御座船が坂出村に到着されることになっていたため、高松藩がいろいろ準備をし、坂出村海浜から白峯陵まで三里の道筋に白砂を敷き詰めた。そして、勅使の御座船が到着の日より 4 日間は坂出港内に一般の船の係留を禁じ、道筋も一般の往来を禁じた。当日御座船は坂出港に入港。人々は軒下に座つて拝観した。一泊し 8 月 26 日、この日は崇徳天皇の御命日で、早朝より雨が降っていた。この日の夜、かがり火を炊き、勅使一行が崇徳天皇陵の前で恭しく明治天皇のお言葉を述べられ、御霊代として崇徳天皇の御真影と御愛用の笙の一番とを神輿に納められた。27 日、坂出村内で泊まり、28 日帰還された。船が港を出ると拝観していた老若男女は皆泣いて御名残を惜しんだ。」というものである。

貴重な記載なので、少し多く書いたがこれより先に出された「勅使下向通達留」では、勅使の一行は 80 人ばかりで京都をでて大阪表より海路御下向とあり、御霊うつしの儀式がいかに大掛かりだったかがわかる。また、白峯神宮には淳仁天皇の御霊も淡路陵より還奉し御祭神として合祀されている。

明治 25 年（1892）は坂出名所ともいえる石の両景橋が完成している。両景橋は先に述べた東と西の塩田の間にある西運河に架かる橋で、これまでの木造の橋が大破したため、石の太鼓橋を造ったもので、当時の費用で 2,360 円余りかかっている。

この時の渡初式について、坂出の初代町長井上文太氏は次のように書いている。



【写真-6 旧両景橋】

「明治 25 年 8 月 1 日、橋上に祭壇を設け、関係者千有余人が参列。完成を祝ったが参観人は山をなし、近くの神社では餅やいろいろの物品を投げ、夕方まで雑踏を極む」と記している。このとき、70 歳以上の人が通り初めをしているが、87 歳を最高に 23 人が渡っている。この両景橋の上に立つと北には瀬戸内海が、南には讃岐富士と呼ばれる飯の山<sup>いいやま</sup>を見渡すことができるため、両景の名がついている。

昭和 7 年に西條八十が作詞し、中山晋平が作曲した「坂出小唄」に、「主の心は 両景橋よ、海と山との ふたごころ」と歌われている。

また、この時代、北海道へ移住する人も多かった。明治 30 年代から 40 年代はじめにか



けて、坂出港だけでも香川県下から集った約 1,000 人が北海道へ移民としてわたっている。



【写真-7 坂出地方専売局】

明治 38 年（1905）には塩専売法が公布され、6 月 1 日から施行された。塩業が盛んだった坂出町に坂出塩務局が開設され、香川愛媛両県の塩田を管轄することになる。塩務局はやがて坂出地方専売局と名前が変わり、港に近い西運河沿いに移転すると、塩の積み込み積み出しの船で賑わい、坂出港の役割は更に大きくなる。

## 5. 大正時代の坂出港

明治時代終わりから大正時代にかけて船が大型化し輸出入も盛んになると、港への関心が高まり、坂出でも大阪港湾部顧問の松尾小三郎氏に港修築について調査を依頼している。

大正から昭和にかけて、32 年間坂出町長と市長を務めた島田恭平氏の談話筆記から坂出港修築の変遷をみている。

「松尾小三郎氏は長く坂出に滞在し、塩を基本産業とする商業発展の可能性を力説した。これによって坂出の港湾進展の方向が決定した。その後、大正 14 年（1925）1 月と 10 月に海軍第二水雷戦隊が入港したが、港湾施設がないため沖に停泊した。そこで干潮時には船も通らぬ浅瀬を深くする必要を痛感した。・・・」とある。そして西運河や港の浚渫、その土砂を使っての埋立てと着々と工事が進み、昭和初期の大規模な港湾整備へと引き継がれていった。

大正時代の港に関する事項を坂出市史年表から拾ってみると、

- ・大正 8 年（1919）坂出、林田港の船舶出入数 汽船 373 隻、帆船 2,978 隻
- ・大正 10 年（1921）坂出港期成同盟発会、同 12 年、日本港湾協会入会などあり、港の浚渫で 500 トン級の汽船の停泊が可能となっている。この他、大正 2 年（1913）坂出港に大阪商船四国線、北日本汽船山陽線などが寄港するようになり、小学生の京阪方面への修学旅行に利用された。

## 6. 昭和時代以降の坂出港

昭和に入ると、港修築の動きは本格的となる。

前記島田恭平氏の談話筆記によると、「坂出港の西埋立てとケーソン岸壁、防波堤の築造をやる事とし、経費は主として埋立地の売却代を以ってあてた。埋立地は 4 万 5 千坪で大蔵省が 1 万坪買うことになり、これで財政的見込がつき、残り埋立地も各方面から希望申出があり前途が明るくなった。こうしたことで各倉庫や事務所などができ、岸壁には 3～4 千トン級の船が横付になる港の形態が整うようになった。港湾修築の結果、輸出入が増大し、航路の範囲も、朝鮮、台湾、北海道、樺太迄達した」としている。

これ以降も坂出港の整備は続けられるが、坂出市史年表で主なものを挙げる。

- ・昭和 10 年（1935）満州派遣軍が坂出港より乗船出発
- ・昭和 13 年（1938）善通寺 11 師団、上海より坂出港に凱旋。このころ坂出港軍需海

運により活況

- ・昭和 17 年（1942）坂出港より軍隊出動
- ・昭和 18 年（1943）坂出港重要港湾に指定される。

このように坂出港にも戦争の影が色濃く出ている。

そして戦後は、

- ・昭和 21 年（1946）坂出港に小麦、外綿、外塩などの輸入始まる。
- ・同年、坂出港改修工事進み 1 万トン級汽船入港可能となる。南海地震で港湾も被害。
- ・昭和 22 年（1947）坂出臨海鉄道建設工事着手 坂出駅・坂出港間 2.8km
- ・昭和 23 年（1948）坂出港税関法による開港場に指定 全国 58 港の一つ

このように戦後も坂出港は発展し、昭和 25 年には天皇陛下も坂出港を御覧になっている。

- ・昭和 39 年（1964）県営番の州地区の埋立工事はじまる（瀬戸大橋の坂出側の工業用地）。昭和 50 年（1975）まで総事業費 139 億円余り、造成面積 619ha で、備讃瀬戸航路の浚渫で出た砂で埋立てる。川崎重工業、三菱化成など多くの企業が進出し、坂出港を中心とする大きな工業地帯が完成した。
- ・昭和 53 年（1978）10 月 10 日瀬戸大橋着工
- ・昭和 63 年（1988）4 月 10 日瀬戸大橋開通 倉敷市児島から坂出市までの瀬戸内海を 6 つの橋と 3 つの高架橋で結ぶ道路鉄道併用橋で、海上部分の延長約 10km、総工費 1 兆 1,200 億円この橋の完成で本州と四国の間は時間的に短縮され、人と物の流れは、これまでの船から車と鉄道にとって変わり大きく変化した。特に対岸を結ぶ旅客船やフェリーにとっては影響大であった。
- ・平成 26 年（2014）坂出港西岸壁が耐震岸壁となる。

## 第2章 「みなと文化」の要素的概要

### 1. 船を用いた交易交流活動によって伝え育ってきた「みなと文化」

#### (1) 文芸・万葉歌・菅原道真の詩「寒早十首」

「第1章 坂出港の古代から現代に至る港の整備と沿革」古代の坂出港でふれた松山の津で詠まれたとみられる万葉歌、巻1-5と巻1-6がある。

讃岐國の安益郡あやのこおり いでまに幸す時に軍王山を見て作る歌

霞かすみ立つ 長き春日の暮れにける。(略)

わが大君おおきみの 行幸いでましの 山越す風の独り居る

わが衣手ころもでに 朝夕あさよいに 返らかへひぬれば 丈夫ますらおと

思えるわれも 草枕 旅にしあれば 思いやる

たづきを知らに 網あみの浦うらの海人あま娘子おとめらが

焼く塩の 思ひそ焼くる わが下ごころ (巻1-5)

返歌 (巻1-6) 略

#### 歌の大意

「霞が立ち込める長い春の日が暮れてしまい、私も家を思って心が痛む。私は天皇のお供をして安益の港（松山の津とみられる）に来ている。山を越して吹いてくる風（家族のいる方向から吹く風）が、私の着物の袖口から朝夕吹き込んでくる。（風が家族の思い出を運んでくる）だから立派な男子だと思っている私も旅に出ているので、憂いを晴らす方法も知らずに網の浦（坂出市周辺の海岸）の海人の娘達が焼く塩のように、私の心も家族を思って焼け焦がれている。」というもので、讃岐の国、安益郡は国府のある坂出市とその周辺のことで、歌の中に、「海人娘子らが焼く塩の」とあるのは、松山の津周辺の海人娘子とみられ、この付近から製塩土器や壺などが発掘されており、歌の背景を裏付けると共に、このあたりが海岸線で塩づくり行われていたことを物語っている。



【写真-8 網ノ浦万葉歌碑 白峰西寺】



【写真-9 古代製塩遺跡】

また、万葉の歌聖、柿本人麻呂も坂出市の沙弥島で歌を詠んでいる。

讃岐の狭岑島に石の中に死れる人を見て

柿本朝臣人麻呂の作れる歌一首併せて短歌  
(巻 2-220～222)

「玉藻よし 讃岐の国は国柄か 見れども飽かぬ  
神柄か・・・(以下略)」

歌にある玉藻よしは現代も香川の枕詞として使われている。この他讃岐の国司時代の菅原道真は「寒早十首」という詩を作っている。

この詩は讃岐にいて、どのような人が厳しい冬の寒さを、いち早く感じるものだろうかと10の職種の人達をとりあげたもので、万葉集の山上憶良の「貧窮問答歌」にも匹敵するともいえる貧しい人に目を向けたものである。この中で7番目に賃金で雇われている水夫のことが書かれている。当時の水夫の生活ぶりがわかるのでこの項を「日本古典文学大系 岩波書店」により全文を記す。

「何れの人にか寒気早き

寒は早し賃船の人 農商の業を計らず

長に直に儼はるる身となる

錐を立てむに地勢なし

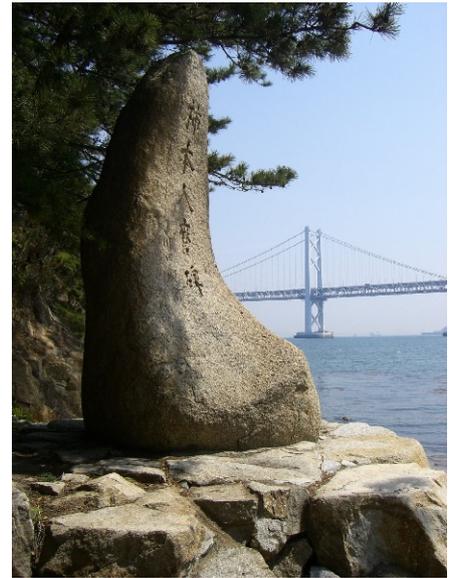
棹を行ること天貧なるに在り

風波の險しきは屑にせず

ただ要む雇ひを受くること頻ならむことを」

訳は

「冬になってどんな人に、早く寒さが感じられるのであろうか。寒さを早く感じるのは賃金によって雇われている水夫である。彼らは自身で独立して農業や商業を自ら営まない。いつまでたっても賃金で雇傭せられる身の上である。彼らは錐を立てるほどの広さの土地ももっていない。水上生活者だからであろう。棹をあやつり、船を走らせることも、天性貧しく、ともしいさがに生まれついているためだ。海上に風波があるというようなことは、眼中にない。彼らの関心事は、船主がたびたび雇ってくれるかどうか



【写真-10 柿本人麻呂碑】

ということである。水上交通運輸業者の実態がわかる。ここから海賊も発生するのである。」としている。

また、この詩の中では9番目に「塩を売る人」がでてきており、坂出付近が古来から製塩が盛んだったことがわかる。

## （2）言語・方言

讃岐弁は関西弁に近いと他県の人からよく言われる。これは古くから京阪神と人・物の交流があることを物語っている。経済面だけではなく、金比羅信仰や四国霊場めぐりなど信仰や観光で訪れる人、逆に京阪神へ行く人も香川県で今も多く、アクセントも似てきた可能性はある。

日本一面積の狭い小さな県でも、東部と西部、島々の言葉は多少ちがいがあある。「NHK、ふるさと日本のことば」（発行所 株式会社学習研究所）で21世紀に残したい香川のことば10の中で特徴的なものをあげておく。

- ①「なんしょん」→なにをしているの？
- ②「～いた。」・「～つか」→ください
- ③「へらこい」→ずるい
- ④「がいに」→大変・はなはだ

この他しゃべりの終わりに「のー」、「なー」をつけるのも讃岐弁の特徴。

- ・「そやけんのー」→そうだから
- ・「今日は寒いの一」「今日は寒いな一」

などと使うが、坂出は香川県の中央部にあたるため、香川県の東西両方の方言が混じっている部分もある。

## （3）信仰・塩釜・金比羅さん

塩田の街坂出では、守り神としての塩釜神社が塩田の数だけあるといっても過言ではない。いずれも宮城県塩釜市にある「塩釜神社」から勧請したもので、特に坂出では文政12年（1829）久米通賢の造成した塩田の守り神としての塩釜神社が信仰されている。

この神社は元は市街地にあったが、道路の拡張工事で現在市の西にある山の中腹に鎮座している。



【写真-11 塩釜神社】



【写真-12 久米通賢像】

神社の横には、通賢さんをお祀りした神社や銅像があり、現在も久米通賢翁顕彰会が命日の5月7日に例祭をしている。

坂出港の原点となった西運河とそれに続く沖湛甫には金刀比羅宮がある。

天保2年（1831）沖湛甫が築造されて船舶の出入港が多くなり、海上安全を祈願するため、天保8年（1837）祭られた。境内の常夜灯には天保10年（1839）のもの、文久3年（1863）のものがある。文久3年のものは尾州（尾張の国）廻船中とあり、大きく立派なもので、名古屋方面の船も入港していたことがわかる。



【写真-13 沖湛甫 金刀毘羅宮】



【写真-14 尾州廻船中の常夜灯】

#### （4）食べ物・さぬきうどん

讃岐といえば、うどんである。香川県は温暖で塩田が発達したように、雨が少ない土地柄であるため、麦の栽培に適していた。戦前戦後も稲作の裏作として盛んに栽培され、農家では自分でうどんを打ち、それぞれ家庭の味があった。田植えが終わった7月初めの半夏生はんげしょうでは、一家そろって「半夏の禿団子はんげ げだんご」といって小麦粉で団子をつくったり、うどんを打って食べる風習があった。

ところが昭和38年（1963）の5月終わりに雨が降り続き、麦から芽が出るなど大被害を受け、この年を境に農家が麦を作らなくなった。従って、麦の輸入量が増え、なかでもオーストラリアの小麦がうどんづくりに適していることがわかり、讃岐うどんブームへとつながっていく。

かつて、香川県は、うどんのない食堂はない状態で、喫茶店でもうどんが食べられたが、やがてセルフうどんの店ができ、うどん専門店が多くなってきている。香川県のサラリーマンの昼食はうどんにバラ寿司、あるいはおにぎりが定番というのは、今も昔も変わっていない。

香川でも有名なうどん店の店主は、一人前になるまでには「うどんの生地をこねて足で踏み、団子にするのに2年、生地を麺棒でのぼし、上手に切れるまでにあと3年、うどんをゆでる修行は、一生続けなあかん」と著書に書いている。

### (5) 海運とアツケシ草

北前船によって、北海道から瀬戸内海に運ばれたというアツケシソウについて、北前船説が平成 20 年頃から覆されている。ちょっと面白い話なので書いておく。

アツケシソウはアカザ科で塩分を好み、秋に赤く色づく。日本では北海道と瀬戸内海沿岸に自生する植物だが、これまで北前船で塩などを北海道に運び、帰りに船を安定させるために、北海道の砂を積んでいた。この砂の中にアツケシソウの種子が入っていて瀬戸内の塩田で繁殖したというのが定説だった。



【写真-15 アツケシソウ】

ところが、この説が DNA 鑑定の結果、間違っているというのだ。

四国新聞（平成 19 年 11 月）、山陽新聞（平成 21 年 6 月）記事から引用すると、「大学教授が DNA 解析をした結果、北海道のものとは一致しなかった。」としている。

山陽新聞では「岡山理科大学の星野卓二教授が平成 20 年（2008）「東京大学の池田博准教授と韓国に行き 3 ケ所で個体を持ち帰り、瀬戸内のものと DNA 解析をし、比べたところ、100%一致した」とし、また「北海道と韓国のは逆に一致なかった」ということで、瀬戸内海のアツケシソウのルーツは、北海道より韓国の可能性が強くなっている。

いずれにしても科学の発達は新しい可能性を生み出すと共に、瀬戸内海と朝鮮半島の交易がさかんだったことを改めて知ることになった。このアツケシソウは坂出の塩田にも多く自生していたが、昭和 46 年（1971）法律によって全国一斉に塩田がなくなり、今やほとんどみられなくなった。

### (6) 参詣・四国遍路とこんぴら参り



【写真-16 遍路道・金毘羅道道標】

四国の春はお遍路さんの鈴の音にはじまるといわれる。四国遍路は四国四県に点在する 88 ケ寺を巡るもので、お遍路さんの着ている衣装には「同行二人」と書かれている。

これは香川県に生まれた空海・弘法大師と 2 人という意味で、全長約 1,400km の遍路道を歩いて巡る人もいる。巡礼の途中、地元の人達が食べ物などを提供する「お接待」があるのも四国遍路の特徴である。

坂出市にも札所が 2 ケ寺あり、そのうち 81 番白峯寺から 82 番根香寺道の間は遍路道は国指定の史跡になっている他、平成 27 年（2015）には、四国遍路が日本遺産に認定されている。坂出には今も石の道標が建っているが、へんろ道とこんぴら道を指し示した道標が意外にも多く、港から四国に入ったお遍路さんも多かったと思われる。

お遍路さんと共に金毘羅参りの人達も港にあふれた。“さぬきのすべての道はこんぴらさんへ通じる”といわれるほど香川県の西部に位置する金毘羅大権現への参詣は人気があ

った。特に江戸前期に河村瑞賢が東廻りに続いて西廻りの航路をつくってから塩飽の船は更に活躍の場をひろげ、海の神様金毘羅さんの信仰も全国に広まったと考えられる。

坂出にも④の常夜灯があちこちにあり、昭和 10 年頃には 2 つの電鉄会社が坂出―琴平の間に電車を走らせており、坂出から金毘羅さんへお参りする人も多かった。

### （7）対岸交流

瀬戸内海には島が多く対岸交流は当初は漁船が必要に応じてその役割を果たしていたと思われる。

坂出港から客船が就航しはじめたのは大正時代である。坂出市史・年表によると、

- ・大正 11 年（1922）坂出商船株式会社が坂出と岡山県玉野市の宇野間を結ぶ巡航船の運航を決めている。途中、坂出沖の島を經由している。
- ・大正 13 年（1924）与島の人が、岡山県の下津井―与島坂出間の定期旅客航路を開いている。（千当海運の前身）この年、坂出―王越間の定期船が帆船から機械船に変わっている。

昭和に入っても、坂出港から岡山県の下津井への渡海船が就航したり、昭和 7 年（1932）には、対岸の岡山県児島と坂出の住民との商取引が多いとして定期連絡船「第十五内海丸」が岡山―坂出―島々―広島県の鞆―尾道まで就航している。

このように対岸の岡山と坂出を結ぶ航路は、坂出港の整備、商工業の発達などで重要度を増すが、昭和 63 年（1988）瀬戸大橋の開通でその役目を終える。

## 2. 交易による流通市場の形成によって育ってきた「みなと文化」

### （1）物資の流通を担う産業

前記のように、坂出は久米通賢の塩田造成で建設された西運河が港の原点となったように商業もまた、西運河に直結する形で商店街が造られ繁栄した。即ち港と商店街が一体化することで、人、物が商店街に入り込み商業の好循環を生んだ。

一つの例として明治 34 年（1901）には、香川県ではじめての県立商業学校が坂出町に設置され、120 人が入学しているのをみても、当時の坂出の発達ぶりがうかがえる。

従って、銀行も大正 4 年（1915）には株式会社綾歌銀行が開業し、大正 13 年（1924）に百十四銀行坂出支店が設置されるなど、終戦後までに 7 つの金融機関が坂出に支店などを置いている。ちなみに、坂出が市となっていったのは、昭和 17 年（1942）で林田村と合併したその時の人口は 3 万 988 人となっている。



【写真-17 旧百十四銀行本町支店】



## （２）交易物資の保管施設・倉庫・サイロ

坂出の経済は塩田と港によって発展してきた。明治 15 年（1882）に坂出塩産会社ができ、坂出の塩は良質のため、北海道をはじめ全国に販路を伸ばし、遠くは朝鮮半島まで船で塩を積み出した。そして、米麦の移出入もはじまり、砂糖の会社も設立された。これに伴い精麦、製粉工場、製麺工場などが建設され、倉庫も港の改修によって周辺に建ち並んでいった。



【写真-18 サイロ】

平成 28 年（2016）の坂出市の港要覧によると坂出港の政府所有米麦保管倉庫の所有は 11 社で、その収容力は 5 万 5,500 トン余り、サイロは 7 社で収容力は 11 万 7,000 トン余りとなっている。倉庫業の経営者の話では、「サイロ（穀物などを保存する塔状の倉庫）は昭和 40 年のはじめ頃登場するが、このサイロの出現でバラ化（袋に詰めずにバラのまま、ベルトコンベアーでトラックや船に直接積み込める）し、荷役も人力から機械に変わり、合理化、能率化した。倉庫の大きな転換期といえる。」ということだった。

## （３）行政施設・船番所・役所（税関・海上保安署など）

### ・船番所

江戸時代高松藩は坂出にも船番所を置き、船舶の見張りや税の徴収などを行っていたが、記録にあるだけでも 2 回場所を変えている。

坂出は埋立てが進み港の位置が変わったためかもしれない。又、坂出浦川口御番所修理との文書も残っており、坂出を流れる綾川の河口にも番所があったとみられている。

### ・役所、税関

坂出港湾合同庁舎に入っている国の役所

- ・神戸税関坂出税関支署
- ・坂出海上保安署
- ・神戸植物防疫所坂出支所
- ・広島検疫所坂出出張所

このうち坂出税関については、昭和 14 年（1939）神戸税関日本栄養食料派出所として発足。昭和 22 年（1947）坂出税関支署に昇格している。坂出には現在外国・外航船が年間約 430 隻入港している。

また、坂出海上保安署は、

昭和 23 年（1948）坂出港長事務所として発足

昭和 25 年（1950）坂出海上保安署設置



【写真-19 新開常夜灯】

坂出保安署の業務海域は坂出市から西、愛媛県との境まであり、第6管区の保安署としては一番広大な海域を受け持っている。また、この海域は備讃瀬戸北航路、南航路があり、これに交わる水島航路があるため、大小の船舶が複雑に航行するいわば、瀬戸内海の大動脈でもある。

### 3. 航路ネットワークを利用した地場産業の発達によって育ってきた「みなと文化」

#### (1) 港湾関連産業・船具・船舶食料品店

昭和46年(1971)から船具商会を経営している人は、「その頃は坂出にも一杯船主の人がいて10数隻の船が主に坂出港に入った原木を国内の木材業者に運ぶ仕事をしていた。

ところが労賃の安い現地で板などに二次加工するようになり、仕事量が減り一杯船主は姿を消していった」と話す。また、この頃から帆船から鋼船に変わっていったという。

この船具商会では主に国内船が対象だが、経営者は「船は一つの家庭」なので、船具以外に家庭用品も扱うとのことだった。また、外航船が対象の船舶食料品店の経営者は「昭和60年頃から船の乗船員に外国人が多くなり、扱う食品も日本食からパンや肉などの需要が増えてきた。ドル建てなので為替レートに左右される」と話していた。

#### (2) 港湾利用産業

##### 漁業

坂出市沖は春に産卵のため瀬戸内海に回遊する桜鯛の漁場で、鯛網漁が盛んだった。その様子を見学するため、観光船が出ていたが、鯛しばり網など大掛かりな漁法は昭和30年代で姿を消している。前記「坂出小唄に“沖の瀬居島 桜はないが春は浮きます桜鯛”」とある。

##### 製塩業

これまで書いているので省略するが、海岸線はすべて塩田地帯で、かつて香川県は全国の塩の生産高1/3を占めており、その中でも坂出が中心だった。

##### 精麦・製粉

坂出市の角の山登山口に大正14年(1925)に建てられた讃岐製粉株式会社の社長功労碑がある。当時の状況を知るために碑文を要約する。「坂出は商工業発達の地の利を得て、米穀産業は盛んだが、小麦はそうではなかった。明治38年頃より有志が製粉業務に取り組み、大正時代初頭に綾商會が設立された。そして大正8年に100万円に増資して讃岐製粉株式会社と改称、大正13年には年額10万円余りの利潤を得た。翌、大正14年日清製粉株式会社と合併するに至った。」と記している。

当時、日清製粉の代表は、美智子皇后さまの祖父貞一郎氏で、坂出進出の理由は、西運河沿いに会社があり、小船で運んだ小麦を直接倉庫に搬入できることや、香川県が良質の小麦を多く作付けしていて、



【写真-20 讃岐製粉社長功労碑】

どん文化があったことだとされている。ちなみに日清製粉坂出工場では、小麦の70%がうどんに適しているオーストラリア産で、1日300トンの小麦を製粉するという。そしてそのうち60%~70%がうどん用で四国全域に流通していると工場長は話している。

#### 坂出の港湾利用産業の今昔

「さぬきの日照りに不作なし」

「さぬき日照りに米買うな」

ということわざがあると話すのは、明治35年精麦工場を開設した食料会社の会長。意味はさぬきは日照時間が長く雨が少ない地方なので、さぬきが日照りの時は、他県は米づくりに良い条件で豊作になり、慌てて米を買わなくても良いということである。

こうした気象条件が塩田を発達させる一方、麦の栽培にも適していたので良質の小麦が収穫できた。しかし、前にもふれたが、昭和38年の長雨による大打撃以降、栽培農家が減り輸入小麦が増えてくるようになるが、同じ会社の社長は、オーストラリア産小麦と香川県産小麦を融合させるなど、よりおいしいさぬきうどんづくりの研究をし、実績をあげている。また、大正時代と近未来のうどんをつくり食べ比べる「さぬきうどんタイムカプセル」というイベントを開催し、うどん文化の向上に挑戦している。

昭和2年創業という倉庫業の社長は、戦前の事として「坂出以南の農家の人達は収穫した穀物を大八車に積んで持ってきた。そして倉庫に保管していた大豆カスなどの肥料を持ち帰るなど農家と倉庫との連携があった。また、昭和始めの倉庫を現在も使っているが、ある時、屋根の修理をしたが、裏が二重になっていて間に靱殻が詰められていた。断熱材として使ったのだろうが、当時の人の知恵に感心する。」と話していた。

明治22年創業の会社経営者は、「当時は原木の保管輸送が収入の70%を占めていたが、30年程前から合板などの製品になって入ってくるようになり、現在は原木の取り扱いはなく、鋼材の保管運送に新たに参入する。」と話す。また、大手運輸会社の坂出支店長は、「坂出港は四国島内に運ばれる完成自動車の70%を移入している」という。坂出港湾利用産業の歴史の一端にふれてみた。



【写真-21 旧日清製粉坂出工場】

#### 4. 港を介して蓄積された経済力に基づき人々の生活の中で育ってきた「みなと文化」

##### (1) 遊里・料亭

昭和 27 年（1952）発行の坂出市史によると、商業の業種別数で料理 16、旅館 26 とある。また、同じ年に東京交通社が発行した坂出の商店街地図によると、商店街とその周辺だけで割烹旅館 7、割烹飲食店 6 店、芸妓紹介所 1 とある。当時の人口は約 5 万人である。

昭和 30 年頃の坂出をよく知る経済人は、当時「芸者を斡旋する検番が 2 軒あり、芸者は 100 人余りいた。花代（芸者を揚げる費用）にもルールがあつて、座敷に芸者を揚げていると他店からその芸者にもらいがかかり、これを断ると花代は 2 倍になり、さらにぜひともというのがあつて断ると 4 倍になった。」と話す。

港町坂出にも売春防止法が施工される昭和 33 年（1958）まで沖湛甫に遊郭があつた。近くの人は「日の出・奴・新栄などの店があり、外国の船員さんも来ていた」と言う。

##### (2) 祭り（港に関わる祭り）

第 2 章信仰の項でふれた沖湛甫の金刀毘羅宮（祭神大物主命）では、かつて夏祭りで神輿を船に乗せ港周辺を 3 度回っていた。同時に仕掛け花火を打ち上げ、通行できないほど見物人が押しかけていたが、「さかいで大橋まつり」が大々的に実施されるようになり、現在では神事中心になっている。

海上渡御の祭りは、番の州工業地帯をつくるため、坂出と陸続きになった瀬居地区でも行われている。こちらは秋祭りで 6 隻の船団を組み、中央の 2 隻をつないで神輿を乗せ、地区の海上部分を回る勇壮な祭りである。

瀬居八幡宮の祭神は神功皇后で歴史は古い。坂出市街地の港に関わる祭りは、塩田を造成した久米通賢に由来する。昭和 9 年、住民の寄付などで通賢さんを祭る坂出神社を新しく建て、翌 10 年、命日の 5 月 7 日に坂出まつりを実施している。

以後、開港場指定を祝して開港まつりと改めたり、坂出港が「昭和 26 年に重要港湾に指定されると、坂出みなとまつりとなっている。更に昭和 41 年には、まつりを 5 月から 8 月に変更し、現在はさかいで大橋まつりとなり、総おどりや太鼓台の競演、花火大会などが挙行されている。」

通賢さんを偲ぶまつりは、現在、坂出青年会議所などが、5 月に塩まつりとして実施している。また、坂出市では、市政施行を記念して、かつての港まつりの復活に取り組んでおり、市民から好評を得ている。



【写真-22 沖湛甫 金刀毘羅宮神輿】



【写真-23 太鼓台】

### （3）文芸施設

「さぬき三白」（塩・砂糖・綿）のうち、坂出は塩が中心だったところから、坂出市塩業資料館を平成9年（1997）に開設している。

## 5. 港を中心とする社会的経済的営みの総体として形成されてきた「みなと文化」

### （1）港：海運に関する歴史施設

#### 坂出墾田之碑

文政12年（1829）久米通賢によって完成した塩田と畑の竣工を記念した碑で、当時の高松藩主松平頼恕が建立した石碑である。坂出市指定の文化財となっている。



【写真-24 坂出墾田之碑】

#### 旧坂出港務所

西運河出口の沖湛甫に面する旧坂出港務所は、坂出の港発祥の地にあり、昭和9年（1934）に建てられた。

この建物は当時1階が大阪商船の乗り場で、2階は坂出港務所として使われていた。また一時期坂出海上保安署としても使われユニークな姿から坂出の港のシンボルとなっている。



【写真-25 旧港務署】

#### 勅使灯籠

「第1章 坂出港の古代から現代に至る港の整備と沿革」明治の坂出港で崇徳上皇の御霊を京都に奉遷する時、その様子に感激した住民が記念として勅使灯籠を建てた。一度壊れたものを有志が再建したもので、4mに余る灯籠は、当時の住民の熱い気持ちが感じられる。塩釜神社境内にある。



【写真-26 勅使灯籠】



【写真-27 両景橋公園】

#### 両景橋公園

同じく明治の坂出の港でふれた西運河に架かる石の両景橋の公園が記念として造られている。

(2) 港町の街並み

港から続く西運河に直結する商店街には往時の面影はない。「昔はよかった」との垂れ幕が商店街の人達の気持ちを現わしている。



【写真-28 西運河に直結する商店街】



【写真-29 昔はよかったの垂れ幕】

### 第3章「みなと文化」振興に関する地域の動き

#### (1) 坂出港の振興と今後の課題

坂出市の調べでは、坂出港の港湾取扱貨物量は、平成27年(2015)約1,600万トンとなっている。ピーク時の平成24年と比べると実に1,100万トンと大幅に減っている。これは平成25年から坂出市番の州にあるコスモ石油の大型石油タンカーが入港しなくなり、原油が輸入されなくなったことが大きな原因で、坂出港にとって切実な問題となっている。

坂出港の今後の役割として、今進められているのが南海トラフ地震への対応である。

東日本大震災、熊本地震と大地震が続き、四国でも太平洋の海底に延びる南海トラフがあり、危険が迫っている。直近の発生は昭和21年(1946)12月で、マグニチュード8.1、四国を中心に1,300人余りが死亡、香川県でも52人が亡くなっている。

そうしたなかで坂出港は災害の比較的少ないところであるため、災害時に四国を対象にした食料や燃料などの供給基地化が考えられている。

坂出港西埠頭は耐震強化岸壁となり、平成26年から供用開始されているほか、これまで四国方面へは出入りできなかった港に近い高速道路の坂出北インターチェンジをフルインター化する計画が立てられている。今後、物流基地として計画的に充実させることと緊急時の輸送機能の強化が望まれる。また、大型クルーズ船の寄港による経済的効果も考えられているが、受入側の魅力づくりが必要となる。

最近注目されているのが、香川、岡山両県の12の島をアートの島にした瀬戸内国際芸術祭であり、去年(2016)3回目を実施された。

坂出も沙弥島が会場の一つとなり、訪れた人との交流も生まれ、良い効果をうんでいる。第3回の瀬戸内国際芸術祭の経済効果は139億円といわれ、観光庁の調べでは去年(2016)の外国人宿泊者は、香川県は35万6,000人で前年比69.5%と全国一の伸び率となっている。(四国新聞)

瀬戸内国際芸術祭の効果が大きいとみられるが、「みなと文化」の向上を考えるうえで、官民一体となったこうした取組みが鍵になるのかもしれない。

そして大切なことは、次の世代の子供達に港の役割や歴史・文化を伝えてゆくことだ。そこから、新しい「みなと文化」が生まれてくるからである。

協力・坂出市みなと課

坂出市教育委員会文化振興課

坂出市史編さん所

坂出商工会議所

みなと関連企業7社

塩釜神社、沖湛甫金刀毘羅宮など

取材を受けていただいた皆様、ありがとうございました。